

アーバンデザインセンター構想

北沢猛

2007/04/17

※本文は、UDCKの創設者である北沢猛先生が2007年4月に記されたUDCKへの思いを、先生個人のウェブサイトより転載したものです。現在のUDCKの体制等とは異なっている部分もありますが、当時の内容としてそのまま掲載しております。



■日本で最初のアーバンデザインセンターUDCK

UDCK : Urban Design Center Kashiwa-no-ha, 柏の葉アーバンデザインセンターは、つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅周辺地域のまちづくり、ことにデザインを考えるために、2006年11月20日に開設された。企画からかわり、現在のセンター長も勤めている。

1年ほどの間にここでどういう時間や活動があったかは、ホームページ <http://www.udck.jp/> をみてほしい。さらに詳しくは2007UDCK アニュアルレポートが参照できる。特に重要なことは活動から生まれた人的ネットワークであり、信頼の関係である。準備期間を含めた1年半の間に、自治体や公的組織、民間企業、NPO、地域組織へ、さらに自治体職員や市民、専門家、企業人など、広い繋がりそして深い信頼が形成されたことである。

わたし自身は、UDCK設立の06年4月に新領域創成科学研究科「環境棟」の完成により、柏キャンパスに通勤するようになり、すぐに地域まちづくりへの参画の機会が巡ってきた。柏市役所で開かれた大学と地域の交流会でアーバンデザインセンターの必要性を話したところ、賛同を得て6月には設立企画をつくり始めた。開設まで、わずか半年の準備。主体となった柏市や三井不動産の判断や、千葉大そして地域組織や千葉県や鉄道会社などの関係者の参加により運営委員会と実施体制ができた。また、300㎡のギャラリーとオフィス空間と屋外の木製デッキの気持ちのいい広場をつくることができた。

駅前の一等地に突然と現れたUDCKは、2年間の実験施設でもある。ここでの活動の成果が次のあり方を決めていくのである。

無論活動の主力は、柏の葉地域の広い意味でのアーバンデザインである。将来の構想計画も必要であり、また、一方では、区画整理事業や住宅建設などが日々進む現場でもある。具体的な空間の質を決めていくデザインガイドラインが必要である。また、それぞれの事業のデザインレビューも必要である。一方で、国際学術都市としての成長が期待されているだけに、地域の価値を形成していくプロモーションも必要とされている。様々な期待の中で、まずは、地域全体の構想を研究することとなった。

エクスプレス沿線地域は、首都圏最後の大きな地域開発が進む。2006年には千葉県と柏市、さらに千葉大学と東京大学の4者が出資して、「柏の葉国際キャンパスタウン構想」の共同研究が始まった。

2年後の2008年2月に構想がほぼ作成された。①環境と共生する田園都市②創造的な産業空間と文化空間の醸成③国際的な学術・教育空間の形成④サステイナブルな移動交通システム⑤キャンパスリンクによるライフスタイル⑥エリアマネジメントの実施⑦質の高い空間⑧実験都市、という項目で、例えば、従来開発から二酸化炭素排出を35%削減するといった具体的でかなり高い目標を設定している。これらは、行政計画や景観条例などの制度の担保、あるいは民間企業の目標として採用などは、これからの調整によるのである。しかし、在る程度は共有されたものとなっている。

公民学連携の地域構想としては初めてののものであろう。UDCKの場を利用して、多くの議論や調査、研究、実験などが行われ、理解が深まってきた。環境への貢献や新しい学術や産業の創出といった今日的な課題もあるが、大きな目的は心地の良さに置いてきた。生きる実感と生きる心地よさが得られる空間と活動が生まれればと考えている。基本となる空間のあり方を、日本の伝統に学ぶことが必要と考えさせられてい

る。

現在、駅前大きな二街区のアーバンデザインの審査が行われている。これは、県がかかわる土地売却の条件として設定されたアーバンデザイン方針（2006）にもとづき、民間企業グループ（京葉銀行、三井不動産、他）が提案して、デザインレビューが進められてきた。ここでは、企業グループもアーバンデザイナーを指名することとなっており、團紀彦氏が選任され、県と企業庁が設置したアーバンデザイン委員会（委員長北沢猛）とが議論を行ってきた。

■アーバンデザインセンターの意義

私がアーバンデザイナーとして働き始めた1970年代後半から、ぼんやりと将来はアーバンデザインセンターが必要だと考えていた。

20年間は、横浜市の都市デザイン室で、計画を練り実践を繰り返し積み重ねることに苦心していた。ここでは、自治体の持つ調整や計画、制度における力が必要な場面があり、また、民間とは違う公共という立場や意識、理念が重要であり、自治体の役割を十分に考えさせられた。アーバンデザインの軸は自治体にある。

一方で、実際の現場において、人と人の関係、あるいは20年30年という時間、空間デザインという高度な専門性が重要となってくると、自治体には苦手な側面も多い。

1980年代には市民の自主的なまちづくり活動を支援する地域密着方式、1990年代初頭には海外などとの連携により都市の本質を巡る議論を行う国際展や交流が盛んとなり、1990年代後半からは、特に企業との連携による共同方式などを模索してきた。

公民連携、パブリック&プライベート・パートナーシップの形が求められていた。

欧米のPPPパートナーシップもいろいろと参照できたのであるが、印象深かったのはバルセロナのアーバンデザインセンターで、子供達が建築や都市、美術などをまなぶミュージアムともなっており、未来社会の設計という期待があった。もっとも参考としたのは、アメリカのアーバンデザインセンターである。

これもいろいろな組織形態や活動があるが、地域や自治体あるいは企業の信託や委任により設立され、基本は公的な資金や地域や企業の負担金、出資金などで賄われている。BID組織のように具体的なパトロールやプロモーションなどの事業を行うケースもあるが、アーバンデザインセンターは、専門家の集団であり、地域の空間計画（総合的なものであるが、あくまでも空間をベースに具体的に構想される）とデザインガイドライン、コードなどをつくり、デザインレビューを加えている。

あるいは、地域の調査や研究から、新しい住宅供給や産業の創出、文化の振興などの活動をおこなうケースも多いが、基本は空間に結びついており、その質が問われている。また、実行や誘導のために基金や起債などにより事業資金を調達しているものも多い。

日本のアーバンデザインセンターは、また別な役割があるとは思いますが、都市づくりやまちづくりのミュージアムであり、歴史から現代、未来に見せるものであって欲しい。その都市の歴史を知ること、未来を考える機会があまりにも少ないからである。幾つかの都市からは相談がすでにきており、2008年には福島県田村市で、アーバンデザインセンター（地域デザインセンター）が開設される。

UDCKの特徴もデザインの仕事にある。現在、スタッフは常勤が4名である。それぞれがデザイン、構想や計画をつくれる専門性をもった人材である。日本の都市空間の質が問われている今日デザインの果たす役割はますます重要となると考えるからである。UDCKをひとつのモデルとして、全国に普及させていきたと考えている。

出典：北沢猛ウェブサイト「空間計画へ」